

# はじらい

2007(平成19)年12月29日鑑賞(ホクテンザ1)



監督・脚本＝ジャン＝クロード・ブリソー／出演＝フレデリック・ヴァン・デン・ドリエッ  
シュ／リーズ・ベリンク／マロウシア・デュブルイユ／マリー・アラン／ソフィー・ボネッ  
ト／ジャンヌ・セラード (アートポート配給／2006年フランス映画／100分)

……思わせぶりのタイトルと、テーマが「タブーと欲び」とくれば、思わずドキリだが、これはれっきとしたフランスの芸術映画……？ もっとも、そのネタはジャン＝クロード・ブリソー監督自身が体験したオーディションにおける、あるセックススキャンダル。スクリーン上で展開される若く美しい娘の自慰シーンと女同士の絡みは見モノだが、さてそれは真実、それとも偽装……？

## 第4章

ひとつとして同じ人生などない

### 思わせぶりのチラシにドキドキ……？

タイトルは『はじらい』、そのテーマは「タブーと欲び」、そしてチラシに写る美女のヌード姿。こんな思わせぶりのチラシを見れば、還暦を間近に控えた男でもやはりドキドキ……？ もちろん、これはポルノ映画ではなく、フランスのジャン＝クロード・ブリソー監督が「今回の作品では、セックスのタブーを追究しました。『はじらい』は私の10年間の経験を活かした賭けの作品です……」と宣伝した映画。

ちなみに、ネット情報によれば、官能的な性を描いた『ひめぐと』(02年)で絶賛されたジャン＝クロード・ブリソー監督は、『ひめぐと』のオーディションを通して4人の女性から性的嫌がらせの罪に問われ、1年の執行猶予と多額の賠償金を支払ったとのこと。しかし、監督はそれを全面否定。すると、『ひめぐと』に続くこの『はじらい』は、監督のその事件に対する弁明を兼ねた問題提起作……？

### 墮天使と祖母とフランソワ監督

この映画の主人公は映画監督のフランソワ (フレデリック・ヴァン・デン・ドリエ

ッシュ)だが、これがジャン＝クロード・ブリソー監督自身を投影していることは最初から明らか。しかし、自叙伝や弁明映画にしたのでは無意味だから、フランソワ監督を客観視させるために登場するのが2人の美女が演ずる墮天使。そして今、妻(ソフィー・ボネット)と共にベッドに眠っているフランソワの夢の中に登場する死んだはずの祖母(ジャンヌ・セラード)。

祖母はフランソワに対してある警告を発するために現れたらしいが、さてフランソワは……? また2人の墮天使にはフランソワをあの世界に連れていくべき任務があるらしいが、それをいつ、どんなタイミングで実施……? このように、フランソワ自身は知らないものの、フランソワの運命は客観的に決まっているらしい……? こちらあたりの映画のつくり方は、いかにもフランス風……?

## オーディションには非難ごうごう……?

『はじらい』前半のポイントは、オーディション(カメラテスト)風景だが、どうもこれは前作の『ひめごと』でやったものを再現しているらしい……? つまり、そこに応募してきた女優(の卵)に求められる演技(?)は自慰。つまり、「女性の真の歓びを撮りたい。だからカメラの前で興奮を感じてほしい」というわけだ。

今ドキの日本なら喜んでこれに応ずる女性がたくさんいるかもしれないが、プライドの高いフランスの女性(?)はそうではなく、啞然とする女性、怒って出て行く女性が続出したため、フランソワ監督の企画は風前の灯火に……。そんな中、積極的に自分を売込み、フランソワ監督の前で2度のエクスタシーに達したのがジュリー(リーズ・ベリンク)。まずは彼女が最初の合格者、そして第1のミュージズとしてスクリーン上に登場することになりそうだが、さてフランソワ監督の戦略は……?

## 第2、第3のミュージズの掘り出し風景は、あなたの目で……?

カメラを手にレンズを通して若い女が自慰にふける姿を覗いているフランソワの姿を覗いていると、いかにも監督らしいが、カメラを離れて女たちがイチャつく姿を演出しているフランソワはただのスケベ親父と思えてくるから不思議なもの……。

フランソワ監督が第2のミュージズ、シャーロット(マロウシア・デュブルイル)を掘り出したのはレストランの中。それも、高級レストランのテーブルの下で、ジュリーとシャーロットが互いの手をスカートの中に差し入れて、自慰行為に耽っていく姿

を見つめる中で決定……？ さらに、第3のミュージズとなったのは、そんな妖しげな雰囲気の人を、料理を運びながら凝視していたウェイトレスのステファニー（マリール・アラン）。まあ、こんなHシーンの醍醐味は私のつたない文章からではなく、あなた自身の目で……。

### 有罪判決と賠償金支払いの可否は……？

この映画に官能モノとしてH度を期待するのか、それともフランソワ監督の裁判モノとしてのスリルを楽しむのかは微妙なところ……？ たしかに官能モノとしての見どころは十分だが、その点ではこれ以上の作品がゴロゴロある。他方、裁判モノとしては、前提となる事実や争点が不明確で、訴えた女性側も訴えられた監督側も一体何を、どのように主張しているのかわからないから、観客はどっちつかずとなり、その魅力はイマイチ……？ フランソワ監督が目指す映画は、3人のミュージズがベッドに寝っころがって示すさまざまな演技(?)によって、それなりに完成したらしい。そしてその後スクリーン上には、監督がそのミュージズたちから民事上の損害賠償請求をされたうえ、刑事事件にも発展したことが示されていくから、そこらあたりの描写は客観的。しかし、互いの主張が全然明確にならないから、いくらフランソワ監督がこの映画で自己の主張を弁明しようとしても、それには説得力ゼロ……？

### 墮天使の下した結論は……？

映画の冒頭に登場した2人の墮天使のうちの1人は、なぜか最初から神から下された命令を実行することを躊躇している様子だった。もう1人の墮天使はそれはダメよと論しているのだが、さてどちらの意見で一致するの……？ ある日暴漢たちに襲われたフランソワ監督は、バットでまずは足と手を、それに続いて頭や顔をボコボコに殴られていたから、そのまま死亡かなと思っていると、そこで中止ということになったから、やはり2人の墮天使の意見は一致していなかったよう……？ もっとも、これによってフランソワ監督は命こそ長らえたものの、今や車椅子生活を余儀なくされることに……。他方、命令を忠実に実行しなかったあのやさしい墮天使は、その直後当然のように消滅させられてしまうことに……。こんな痛ましい結末だが、こんな危険を冒してまで製作された『はじらい』は、果たして『ひめごと』に続いて大ヒットすることができるのだろうか……？

2008(平成20)年1月4日記